

1960 年代のブラック・アメリカ —オーガスト・ウィルソンの『二本の列車が走っている』—

落合 貞夫

日本大学大学院総合社会情報研究科

Black America in the 1960s —August Wilson's *Two Trains Running*—

OCHIAI Sadao

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

In *Two Trains Running*, set in a small restaurant in the Hill District of Pittsburgh in 1969, August Wilson depicts how African Americans lived through the turmoil of the 1960s. It was the year when the decade of the Civil Rights movement and the Black Power movement came to an end. Malcolm X and Martin Luther King Jr. had been assassinated, leaving African Americans without a leader. Wilson ushers in the off-stage presence of 349-year-old Aunt Ester, the most significant character in his *Twentieth Century Cycle*. She is a shaman who guides her people with wisdom based on the entire black experience in America. In this essay, I maintain that Wilson created Aunt Ester as an alternative moral and spiritual leader for his people in the aftermath of the 1960s.

1. はじめに

August Wilson (オーガスト・ウィルソン) は 20 世紀サイクルによって、アメリカの正史ではなく、黒人のアメリカ史という、もう一つのアメリカを再現した劇作家である。1969 年に時代設定された *Two Trains Running* [二本の列車が走っている](1990)には、キューバ危機、ワシントン大行進、ケネディ大統領の暗殺、ベトナム戦争などの 60 年代の歴史的事件に代ってアフリカ系アメリカ人が、その時代をどのように生きていたかがピッツバーグの黒人居住区を舞台に描かれている。公民権運動やブラック・パワー運動の 60 年代は「黒人革命の時代」と呼ばれたが、60 年代末に至っても、彼らの生活に本質的な変化はなく、その多くはなお、権利を侵害され、極貧の状態にあった。これを彼ら自身がどう認識し、どう対峙していたのか。タイトルが示唆するものは、キング牧師の公民権運動とマルコム X のブラック・パワー運動だが、ウィルソンの登場人物たちは時代のヒーローであった二人の暴力的な死に臆することなく、叡智と不屈の精神によって権利を主張し、誇りある

人間として生きることを諦めない。

場所はピッツバーグの荒廃した黒人居住区ヒル地区である。前年の都市暴動で街は破壊され、他に移転できない貧しい者しかこの地域には住んでいない。低所得者の死亡率は高く、葬儀屋だけが繁盛している。

登場人物 7 人のうち、葬儀屋のウエストと食堂を営むメンフィス以外は、資産もない貧しい者たちである。荒廃した地区の再開発事業のため、食堂は立ち退きを要求されているが、市当局が満足できる補償額を提示しない限り、メンフィスに妥協するつもりはない。

白人肉屋にだまされたペンキ職人のハムボーンは、9 年半、正当な報酬を求め続けて死んでいく。刑務所帰りのスターリングは仕事を探すものの、まともな職が見つからない。彼らの拠り所となり、その運命を変えることのできる人物としてエスターおばさんという 349 歳のシャーマンが登場する。彼女の導きで、メンフィスは高額な補償金を市当局から勝ち取り、スターリングは白人肉屋からハムを奪い取っ

てハムボーンの思いを果たす。ウィルソンが描こうとしたのは、一人一人の生活をかけた闘いの歴史であり、普通の人々が懸命に生きる姿である。以下、本稿では、キング牧師とマルコム X、そして彼らの思想と対照させながら、ウィルソンの創造になるエスターおばさん―民族の象徴であり、アフリカの精霊―が、60年代のブラック・アメリカにとってどのような意味を持つのか、考察する。

2. 『二本の列車が走っている』概要

2.1. 舞台設定

1969年、ピッツバーグ市の黒人居住区ヒル地区にある食堂が舞台となっている。3つのテーブルとカウンターしかない小さな店である。経営者のメンフィスは、元はミシシッピ州の農民であった。彼は8年前に5,500ドルでこの建物を購入し、ここで余生を送るつもりであった。食堂の向かい側には、ウエストの営む葬儀屋と、白人ルッツの肉屋がある。

2.2. 第1幕

メニューを記した黒板の隅に、ナンバーズ（数当て賭博）の当選番号が書かれている。ウルフが店の電話でナンバーズの注文を受けている。そこにメンフィスがやって来て、店の電話を使って賭博の注文を受けるなど文句を言う。2人の会話から、メンフィスの妻が2か月前に家出したことがわかる。何の不自由もなく暮らしていた妻がなぜ家出をしたのかメンフィスにはその理由が分からない。ウェイトレス兼料理人のリサは、「奥さんはあなたの扱い方が気に入らなかったのよ」と言う。そのリサの両脚には、カミソリの傷跡がいくつもあ

る。そこに65歳のホロウェイが来て、サミュエルの葬式で通りには長蛇の列ができていると報告する。サミュエルは預言師として富を築き、7〜8人の妾がいたらしいが、葬儀屋のウエストのほうがもっと金を儲けているはずだとホロウェイは言う。実は、ウエストは周辺の土地を買いあさり、不動産取引でも稼いでいるのだ。

次に40代後半のハムボーンが現れ、「あの人は、俺にハムをくれると言った。俺は、ハムが欲しい」と繰り返す。精神に疾患のある彼はこの言葉しか話

せない。彼は、上手にできたらチキンの代わりにハムをやるとルッツに言われて肉屋のフェンスにペンキを塗ったのだが、ルッツはハムを出さなかったので、以来9年半、毎朝店の前に来てこの言葉を繰り返しているのである。

さらに銀行強盗で5年の刑期を終えたばかりのスターリングが店にやってくる。彼は職を探しているのだが、無教育で前科のある彼にまともな仕事はない。ホロウェイは、エスターおばさんに会えば必ず運勢を変えてくれると彼に教える。ただし、川に20ドル投げ捨てる必要がある。サミュエルもエスターおばさんに会ってから大きく運勢が変わり、預言師として成功し富を築くことができたのだと。その話を聞いたスターリングはエスターおばさんに会いに出かける。

その翌朝。いつものようにハムボーンが肉屋の前に来てハムを要求する。それを見て正気の沙汰ではないと言うウルフとメンフィスに、ホロウェイは、「あいつは白人が投げ与えるものなら何でも受け取ろうとはしない」のであって、我々よりも正常な人間だと言う。リサについても、早熟な彼女は12歳から男の欲望の対象として見られてきたので、足に傷をつけ自分を醜くしたのだと言う。また、メンフィスが無職のスターリングを怠け者だと非難するのに対して、「黒んぼは、世界一の働き者だ。300年もただで働いてきたんだ。昼休みも取らずにな」と諭す。そこにウエストが来て、食堂を15,000ドルで買おうと言うが、メンフィスは25,000ドル以下では絶対に売らないと断る。

次にマルコム Xの誕生日を祝う集会のチラシを持ってスターリングが入って来る。メンフィスは、黒人たちは自由や平等や正義を求めているが、この社会に正義はなく、「銃がないと何もできない」と自説を述べる。同じ言葉を繰り返すハムボーンに苛立ったメンフィスは、彼を店から追い出してしま

う。その翌日。スターリングはマルコム Xの集会にリサを誘うが、暴動になるかも知れないからと彼女は断る。職が見つからず、金を得るためにナンバーズが止められないスターリングに、彼女は781という数字を提案する。そこに入ってきたウルフにスターリングは、銃の入手を依頼する。ホロウェイがまた

刑務所に戻ることにするぞと忠告するが、「どっちみち、そこに行くようになっているんだ」とスターリングは反論する。彼がハムボーンにブラック・イズ・ビューティフルという標語を教えているところに、裁判所からメンフィスが帰って来て、市は 15,000 ドルの補償額しか提示しないと怒りをぶちまける。

2.3. 第 2 幕

次の日。スターリングが花束と石油タンクを持って食堂に来る。花はリサのためにウエストの葬儀場から盗んできたものである。石油も街角で盗んだものでメンフィスに 2 ドルで売りつける。ウエストが再びやってきて食堂を 2 万ドルで買おうと言うが、メンフィスは 25,000 ドル以下では売らないと断る。実は、彼にはミシシッピーで白人に奪われた農地を取り戻す積年の思いがあり、その農地を買い戻す費用が必要なのだ。

彼は若い頃、不毛の土地を白人から買った。彼の祖父は井戸掘り名人であったので、井戸を掘り、作物を育てた。ところが、水が出た場合は、土地の売買は無効とする契約を結んでいたのである。メンフィスは、ラバを殺され、作物に火をつけられて土地から追放された。

話はエスターおばさんに移る。ホロウェイは、白人に卑屈な祖父を憎み、殺そうと思ったのだが、エスターおばさんに会い、彼女の指示通り川に 20 ドル投げ込むと、祖父は病気になるし死んでしまったと語る。

翌日。ハムボーンが行方不明になる。サミュエルの埋葬に群衆が詰めかけた様子をウルフが伝える。彼はまた、スターリングの 781 が当選したが、胴元の白人が賞金を半分に値切ったと言う。メンフィスは、壁からマルコム X の集会のチラシをはがし、ブラック・パワー運動を批判する。彼は裁判所に行く前にエスターに会うことにする。

ハムボーンはアパートで死んでいた。彼を生活保護受給者用の粗末な棺に入れるのは可哀そうだとリサは言うが、採算が取れないとウエストは受け付けない。スターリングがやってきて 781 が当たり、1,200 ドルの賞金が手に入ると喜んでリサに報告する。しかし、ウルフから賞金が半分に値切られたことを知

って激怒し、死を覚悟して、白人胴元に談判しに行く。

リサが店の掃除をしていると、スターリングが帰って来る。彼はエスターの家を訪れ、言われたとおりに川に 20 ドル捨てたことを話す。また、エスターによれば、リサは神がスターリングに送った女性である。彼はリサを口説き拒否されるが、やがて修理されたジュークボックスから音楽が流れ、二人は踊り出してキスを交わす。

翌日。表通りには仕事にあぶれた黒人が多数たむろしている。食堂では、ハムボーンの死、放火事件、黒人の集会が 3,000 人で大成功であったことなどが話題になる。火災が発生すると、野次馬の黒人が放火犯として逮捕され、保険金がおける仕組みになっているとホロウェイが語る。

そこに酒を飲んで上機嫌のメンフィスが帰って来る。エスターの指示に従い川に 20 ドルを捨てたところ、市は 35,000 ドルの補償金を提示したのだ。家出した妻とも和解することができた。エスターから、「落としたボールは拾いに行かねばならない」と告げられた彼は、農地を取り戻すためミシシッピーに旅立つ決意を語る。黒板のハムボーンの葬儀の日程を見て、彼の死を知ったメンフィスは、これで花束を買えとリサに 50 ドルを渡す。彼が新しい食堂の夢を語っていると、顔と手から血を流したスターリングが、「これをハムボーンの棺に入れてくれ」とハムをウエストに渡す。外では、肉屋の警報器が鳴っている。

3. ウィルソンの 60 年代

3.1. ウィルソンの思想形成と黒人革命の終焉

60 年代は、公民権運動とブラック・パワー運動に代表されるように、アフリカ系アメリカ人の政治意識が最も高揚した時代であった。その成果が、64 年に成立した公民権法である。リンカーンの奴隷解放宣言(1863)から数えて約 100 年後のことであった。しかし、公民権運動は主に南部で展開され、ウィルソンの住む北部都市ではブラック・パワー運動が中心であった。そのため、当時 20 歳前後の彼にとって 60 年代とはブラック・パワー運動であり、それが彼の思想形成の炉となったのである。

But the Black Power Movement of the '60s was [in fact] a reality. It was the kiln in which I was fired, and has much to do with the person I am today and the ideas and attitudes that I carry as part of my consciousness. (*The Ground on Which I Stand* 12-13)

そして、60年代末の状況を次のように述べている。

In 1968, the relationship of blacks to white Americans was not that much different than the relationship of slaves to their masters. It was like a day off on the plantation. Nobody was working. There were no jobs. There were all these people with families but no means of support, because society didn't have any use for them. (qtd, *Dramatic Vision* 170)

1968年に至っても、黒人と白人の関係は奴隷制時代の奴隷とマスターの関係から、ほぼ変わっていなかった。68年にキング牧師が暗殺されると、全米各地で暴動が起こり、連邦軍が出動した。略奪や放火で黒人の人権拡張運動は国民の支持を急速に失っていった。同年の大統領選挙では共和党のニクソンが当選し、長い反動の時代が始まる。メンフィスの苛立った言動や食堂のジュークボックスが壊れて歌が聞こえないという状況は、公民権運動が成果を上げることなく終焉したこと、そして黒人革命が暴動という自己壊滅的な状況に至ったことを象徴するものである。

3.2. ウィルソンが描く 60年代末の米北部都市におけるアフリカ系アメリカ人の状況

第一に、黒人層の貧困層と中産階級への二極化がある。失業中のスターリング、生活保護で暮らすハムボーン、給料が安くて結婚できないウルフなど、貧困の悪循環から抜け出せない人々がいる。家庭を持たない彼らの食卓となっているのが、メンフィスの食堂である。その一方で、葬儀屋を営んで成功し、富を築いたウエストや預言者として多くの信者を獲得し富豪となったサミュエルのような黒人たちもいる。ただし、彼らは白人社会からではなく、貧しい

黒人大衆から富を得たことに留意する必要がある。

第二は、黒人貧困層の住む地区での荒廃の進行である。頻発する殺人事件や麻薬中毒による死亡事故、放火事件などが登場人物たちによって語られる。キング牧師が暗殺された直後にピッツバーグでも暴動が起きたが、これによって街は大きく破壊された。劇の舞台となっているヒル地区でも、医者、薬局、スーパーマーケット、雑貨店、歯医者、靴屋などが移転し、日常生活が成り立たない。資力のある者は安全な郊外に移住したが、転居できない貧困層が街に残った。彼らにはナンバーズという数当て賭博に金を賭けるしか、貧困から脱出する方法はないのである。実際、メンフィスが食堂を購入することができたのは、ナンバーズで大金を当てたからである。

北部都市における黒人の失業率は高く、たとえ職はあっても貧困から抜け出せない低賃金労働であった。出所したスターリングは、建設会社で働き始めるがすぐに止めてしまう。1時間1ドル25セントの労賃では1日8時間働いても10ドルにしかない。年間300日働いても3,000ドルで、1969年の黒人中位所得5,999ドルの半分でしかない。この年の白人中位所得水準は約1万ドルで、白人と黒人の賃金には大きな格差があった。(上杉 147) 黒人は労働組合にも加入できなかった。また、メンフィスは火災保険に加入できない。黒人が火災保険に加入しないように高い料金が設定されているからである。ウルフは警察に不当逮捕され、裁判もないまま3か月も刑務所に入れられた。彼が言うように、この街の黒人はほとんどが逮捕された経験があるのだ。

こうした状況から街は暴力に満ちている。いくら探してもまともな仕事が見つからないスターリングは、ついにピストルを手に入れる。リサが集会の参加を拒むのは、いつそれが暴徒化するかも知れないからだ。リサの兄は、人を殺さないうちにとピッツバーグから出て行った。メンフィスが言うように、この街には互いに殺し合う黒人しか残っていないのだ。彼も白人に理解させる唯一の方法は、ピストルの力であると自説を述べる。ウィルソンは葬儀屋ウエストを登場させ、預言師サミュエルの葬式を大きく扱っているが、サミュエルの葬儀の他にも、多くの死者についての語りがあり、69年当時の暗い世相

を伝えている。マルコムXとキング牧師の死をはじめ、メンフィスは母の死を語り、ホロウェイは祖父の死を語っている。スターリングは、孤児院の13歳の少年エディ・ラングストンの自殺やジョンソン婦人とルイス先生の死を語る。食堂の元所有者L.Dは脳卒中で、ババ・ボーイの女房は麻薬で、ビガブーは警官に射殺されて死んでいる。かつて、大物ギャングラーのパッチネック・レッドの壮大な葬儀があり、ウエストの妻の死があった。そしてハムボーンが誰にも看取られずに死んでいく。メンフィスの愛したラバの死も語られる。この時代は都市暴動で多数の黒人が警官や軍隊に射殺された。本作の多くの死はこれを語るためのものだ。

こうした絶望的な状況の中で、新興宗教が人々の心を捉える。サミュエルは元キリスト教の牧師であったが、エスターおばさんの啓示によってアフリカの神に宗旨替えした。預言師サミュエルの頭に触れば金運に恵まれるという噂で、彼の葬儀には長蛇の列ができ、埋葬は2日間延長された。サミュエルと彼の主宰する「第一アフリカ会衆王国」は、それぞれイライジャ・ムハマド (Elijah Muhammad, 1897-1975) と NOI (ネイション・オブ・イスラム) を想起させるとの指摘がある。(Bottoms 152)

一方、Harry J. Elam, Jr. は、サミュエルのモデルは、Daddy Grace (1881-1960) と Prophet Jones (1907-1971) であるとしている。(194) Daddy Grace はカリスマ的魅力で300万の信者を獲得し、600万ドルの資産を残したとされる。Prophet Jones は、600万の信者と362か所のセンターを持ち、54室もある大邸宅に住んでいた。いずれもアフリカ系アメリカ人である。こうした新興の教会や預言師は、黒人大衆を苦悩や悲しみから救済するものとして信仰を集め、巨大な富を築いたのであり、この時代の一側面であった。リサも、あやしげな預言師の熱心な信者となり、十分の一税を支払っている。

3.3. ウィルソンの主張するアフリカ系アメリカ人の生き方

登場人物は人種差別撤廃運動に参加するなど、積極的に興味や関心を寄せてきた人たちではないが、彼らの生き方に60年代黒人革命を経たウィルソン

の主張を見ることができる。

ハムボーンは毎朝肉屋の前でハムを要求するが、これは白人に対して正当な権利を求める行為であり、60年代の公民権運動を象徴する。倦むことなく声を上げ続ける彼の態度は、キング牧師の白人の良心に訴えるという非暴力の運動に通じる。一方、スターリングは顔と手から血を流しながら、件の肉屋からハムを力ずくで盗んでくる。これは「必要ないかなる手段をとっても」というマルコムXの戦闘的な言葉想起させる。

メンフィスはマルコムXの誕生日を祝する集会のチラシを壁から引きはがし、ブラック・パワー運動は人々を困惑させていると批判する。これは、ブラック・パワー運動が見るべき成果を勝ち取っていないことへの苛立ちであり、必ずしも人々の共感と支持を得ていない状況を示している。マルコムXが説いたネイション・オブ・イスラムの教義は、白人は悪魔であり、やがて黒人支配の時代がくるというもので、アメリカ国民に脅威を与えた。さらにメンフィスは、マルコムXもキング牧師も黒人に殺されたことを指摘し、黒人層内部の対立を批判する。そして、この社会に正義はなく、イエス・キリストにも正義はない、“You can’t do nothing without a gun. Not in this day and time. That’s the only kind of power the white man understand.” (41) と白人の強権支配を非難する。

そのメンフィスから怠け者だと非難されたスターリングには、逆境の中でも生き抜こうとする強い意志がある。街角で盗んできた石油をメンフィスに売りつけ、葬儀用キャデラックの運転手になりたいとウエストに頼み込む。それを断られると、車の清掃係にしてくれと頼む。昼休みの工場労働者にサンドイッチを売ろうとメンフィスに持ちかける。スターリングには、ナイトクラブの経営や牧場を買うという夢があり、必ず金持ちになってキャデラックに乗れる日が来ると信じている。彼の男としての理想は、ポケット一杯に金を入れ、いい女を連れて高級車に乗ることである。無邪気とも言える彼の言動には、逞しく生きる力がある。ナンバーズの賞金を半分に値切られたとき、白人胴元に抗議に行くが、これは彼が強い権利意識の持ち主であることを示している。

彼は、死んだハムボーンのために肉屋からハムを強奪した。これをウィルソンは正当な権利の行使として肯定的に描いている。「スターリング」は「すぐれた」や「立派な」を意味しており、ウルフの敗北主義的な生き方の対極となっている。

そしてメンフィスには、食堂を 25,000 ドル以下では絶対に売らないという非妥協的な精神がある。いつの日かミシシッピの農地を取り戻すという念願がある。ハムボーンも、9 年半の間、正当な報酬としてハムを要求し続けた不屈の魂の持ち主といってよい。彼ら 3 人は正当な権利を要求する点で共通している。James V. Hatch もウィルソンが造形した登場人物について次のように述べている。

Wilson's greatest contribution to American theatre may have been his ability to present black people as beautiful and extraordinarily heroic in their everyday lives. (456)

公民権法の成立で黒人は法的には白人と平等となったが、経済的な改善は見られなかった。特に都市部の黒人貧困層は置き去りにされた。そのため、キング牧師の非暴力の統合主義は北部では人気がなく、むしろ戦闘的なマルコム X に人気があった。スターリングが参加したマルコム X の誕生日を祝う集会は、500 席の会場に 3,000 人が集まった。それに対して劇中でキング牧師の名は 1 回しかでてこない。こうした北部都市の雰囲気をつ端的に伝えているのが、ハムボーンとスターリングの次の掛け合いである。

HAMBONE: I want my ham!

STERRING: Malcolm lives!

HAMBONE: I want my ham!

STERRING: Malcolm lives!

HAMBONE: I want my ham!

STERRING: Malcolm lives! (60)

ハムボーンはキング牧師の公民権運動の象徴であるが、彼の“I want my ham!” は、その滑稽な響きにも係らず、人間としての権利を求める声でもある。この正当な権利を要求する声と、マルコム X を称賛す

る声の掛け合いにウィルソンの主張を見ることができる。

メンフィスは最終的に市当局から高額な補償金を得ることになるが、サイクル劇の中でアフリカ系アメリカ人が社会的な勝利を手にするのはこの作品だけである。この勝利を可能にしたのは、NAACP（全米黒人地位向上協会）の無能な黒人弁護士から、市当局との交渉をより有利に進められる白人弁護士に替えたからであるという指摘がある。(Elam 159) 現実主義者のメンフィスらしい選択であるが、これは“by any means necessary” というマルコム X の思想に通ずるものだと Stephen Bottoms は述べている。(153) 高額な補償金が提示される前日に、マルコム X の誕生日を祝う集会に 3,000 人が集まり大成功したことも無視できない。整然とした大集会は、市当局にとって大きな圧力になったことが想定されるが、こうした展開にウィルソンの姿勢が伺えよう。

3.4. Two Trains が意味するもの

アフリカ系アメリカ人にとって鉄道には特別な意味がある。南部から北部に移住したとき、彼らは重大な決心をして鉄道に乗った。鉄道はより良き未来を切り開くという夢と希望のメタファーである。*Two Trains Running* のタイトルはマディ・ウォーターズの *Still A Fool* (1951) の歌詞から採られているのだが、歌詞の内容は、二本の列車のどちらに乗っても行きたい方向ではないというものである。この作品のエピグラフも、“If the train don't hurry there's gonna be some walking done”（汽車がのろけりゃ、ちょっくら歩かにならんのう）という伝承の言葉が記されており、鉄道は役に立たないものになってしまっている。ウィルソンはこの作品を書き始めたとき、次のように考えていたと Richard Pettengill とのインタビューで述べている。

I wanted to write a play about a character for whom neither of these trains were working. He had to build a new railroad in order to get to where he's going, because the trains are not going his way. That was the idea when I started out exploring. (Pettengill 156)

つまり、第三の新しい汽車が必要だと考えていたの
である。では、その新しい汽車は、作品の中でどの
ようなものとして提示されたのだろうか。ウィルソ
ンは、同じインタビューで次のように答えている。

In this play there are actually three ways you can
change your life, but one of those ways, Prophet
Samuel, is dead, so that one is gone. So there's
Malcolm X, symbolized by the rally, although he
never became as important a part of the play as I
originally thought he might. The other way is Aunt
Ester, who became more important than I thought
she was originally going to be. So from my original
idea—that there was a character for whom neither
train worked—I ended up saying that you need both
Malcolm X and Aunt Ester in order to change your
life. (Pettengill 156)

最終的には、マルコムXとエスターおばさんの両
方の力を借りる必要があると述べている。さらに、
当初、ウィルソンはマルコムXをより重要と考えて
いた。スターリングは、“He the only one who told the
truth.” (40) とマルコムXを称賛しているが、ウィル
ソンも青年時代に衝撃的とも言える影響を受け、闘
士の精神を学んだ。しかし、劇の展開にしたがい、
マルコムXは後景に止まり続け、むしろエスターお
ばさんの重要性が増していったのである。

Originally I thought the rally was going to be a more
important part of the play than it is—this Malcolm X
rally that was looming over the play. Somehow it
stayed in the background as other stories of the
characters moved. So actually Aunt Ester has more
impact on the play. Two of the characters do go up to
see Aunt Ester. So she has more of an impact than
Malcolm. (Shannon, *An Interview* 127)

349 歳のエスターおばさんは、植民地時代からアフ
リカ系アメリカ人のすべての歴史を生き抜いてきた
不滅のシャーマンであり、ウィルソンが創造した民
族の象徴として、マルコムXより重要な位置を占め

るようになったのである。

しかし、一般的に 60 年代という時代から想起する
Two Trains とは、キング牧師かマルコムXか、すな
わち統合主義か、分離主義かであろう。ウィルソン
も、“There were two ideas in the play, or at least two
ideas that have confronted black America since the
Emancipation, the ideas of cultural assimilation and
cultural separatism.” (Pettengill 155) と述べている。
そして実際、キング牧師に連なるハムボーンと、マ
ルコムXに連なるスターリングとを登場させている
のである。ただし、統合主義か分離主義かという対
立軸による物語ではなく、新しい trains を発見する
物語をウィルソンは書いたのである。

1993 年に出版された *Two Trains Running* のブック
カバーには、題名に関して次のようなウィルソンの
言葉が書かれている。

There are always and only two trains running. There is
life and there is death. Each of us rides them both. To
live life with dignity, to celebrate and accept
responsibility for your presence in the world is all that
can be asked of anyone.

ここでの Two Trains とは、生と死のことである。我々
は、生に向かう列車にも死に向かう列車にも乗って
いると言うのである。

以上のように、Two Trains についてウィルソンが
示すものは、時によって必ずしも一定でない。さら
にウィルソンは、two trains には「選択」の意味があ
るとも述べている。

RP: . . . different possibilities for interpreting that
title?

AW: Oh yeah, sure, and they have to be aware of the
choices that we as black Americans need to make.
(Pettengill 162)

この劇では、チキンかハムか、預言師サミュエル
かエスターおばさんか、黒人弁護士か白人弁護士か、
非暴力かピストルか、15,000 ドルか 25,000 ドルか、
10 ガロンのバケツか小さなカップか、など様々な選

扱がせまられている。しかし、とりわけ重要な選択は、エスターおばさんが言う「落としたボールを拾いに行くか行かないか」であろう。メンフィスは、いつかミシシッピーに帰り農地を取り戻すのだと言いつつ、まだ実行できないでいた。しかし、ハムボーンやスターリングと同じように、人生をあきらめるわけにはいかないのだ。この劇のタイトル *Two Trains Running* は、「落としたボールを拾いに行く」ことを選択し、念願を達成しようと決心した者が乗る汽車のことであり、夢と希望を運ぶメタファーとなっている。

4. エスターおばさんとホロウェイ、二人が意味するもの

エスターおばさんは、『二本の列車が走っている』(1990)、『キング・ヘドリー二世』(*King Hedley II*, 2000)、『大洋の宝石』(*Gem of the Ocean*, 2003)、『ラジオ・ゴルフ』(*Radio Golf*, 2005) の4作品に登場するサイクル劇最大のメタファーである。彼女の教えは、“If you drop the ball, you got to go back and pick it up.” (98) であるが、これはウィルソンの基本的な理念の表明でもある。

You got to have the ball. It's a matter of reclaiming the past, as opposed to discovering who you are. I think we know who we are, but it's a matter of reclaiming and saying—irrespective of recent political history—that we come from a long line of honorable people. (Pettengill 157)

劇の結末でメンフィスは、失った農地を取り戻すためにミシシッピーに旅立つことを決心し、死んだハムボーンにはハムが与えられて、エスターおばさんの尊厳を持って生きよという教えが実行される。ウィルソンはこの劇において初めてサイクル劇最大のメタファーである彼女を登場させた。それは 60 年代に W.E.B. デュボイス、マルコム X、キング牧師が次々と未解決の課題を残したままこの世を去っていったことと無関係ではない。

Barbara Lewis によれば、エスターはアフリカの水の精霊 Mammy Wata (マミワタ) に似ていると言う。

Mammy Wata は水の女神であり、古い伝説を語り、人を癒す力を持つ。水先案内人であるが水の底に消えて、王国や力の源泉と行き来することができる。ブラジルでは Yemanjá、トリニダード島では Maman Dlo、ハイチでは LaSiren と同類とされ、名称は異なるがキューバやジャマイカにも存在し崇められている女神である。(149)ピッツバーグは、アレガニー川とモノンガヒーラ川が合流してオハイオ川となる水上交通の要所であり、かつては「西部の入り口」と呼ばれていたほどであるから、水の精霊が住むにふさわしい場所である。20 ドルを川に投げ込めば、エスターおばさんのもとに届くというのは、彼女が水の精霊であることを暗示している。

エスターおばさんは隠れたシャーマンである。実際、彼女は舞台の外にあり、生きた姿を現わさない。彼女の住む家は、食堂と同じワイリー通りにあるのだが、メンフィスはどこにあるのかさえ知らない。預言師サミュエルの大きな評判とは対照的に、ひっそりと暮らしている。エスターおばさんという偉大な存在が身近にあることを人々は知らない。彼女の存在を知らしめるのがホロウェイである。彼はこの街の生き証人であり語り部で、サミュエルが成功した経緯やリサの両脚の傷について、またハムボーンが毎朝ハムを要求するようになった事情について詳しく語る。しかし、ホロウェイの重要な役割は、苦境にあるスターリングやメンフィスにエスターおばさんの存在を知らせることにある。

また、ホロウェイはメンフィスに、我々の祖先は船に積み上げられ、二か月かけて海を越えて来たのだと教える。そして、国中に線路と道路をつくり、電柱を建てたのはアフリカ系アメリカ人であり、白人は黒人の労働によって富と財産を築き上げてきたのだと語る。ホロウェイは心の平穏を得るために定期的に彼女と会っており、彼女の 349 年に渡るアフリカ系アメリカ人の物語を聴いている。彼は誇りある黒人の歴史を語る街の哲学者であるとともに、エスターおばさんの代弁者でもある。彼にはエスターおばさんのような霊的な能力はないが、二人はアフリカ系アメリカ人の体験や知恵、歴史の継承者であり、ともに黒人コミュニティにおける精神的支柱である。

5. まとめ

60年代末に時代設定されたこの作品は、アフリカ系アメリカ人の思想の転換点とも言える新しい考え方や生き方が見えてきた時代を記録している。登場人物は普通の人々で、欲深い人間でもあり思いやりのある人間でもある。ユーモアたっぷりの会話を楽しみ、希望に胸を膨らませたり、絶望したりする人間である。しかし、ハムボーンが肉屋の前で、ハムを渡されることを待っているように、彼らは本来の権利を求めて闘っている。

ウィルソンはハムボーンについて、“he is the one character that affects everyone else in the play. He’s the one character who, when he dies, changes things. There are some big changes.” (Pettengill 156) と述べ、人々の生き方を変える大きな存在であるとしている。「俺はハムが欲しい」と言い続けて死んだハムボーンは哀れとしか映らないが、最後まであきらめることはなかった。この点において彼は公民権運動を闘った無数の名も無き黒人大衆の代表であるとも言えよう。

ハムボーンが象徴するものは、60年代の末になっても正当な要求が無視されるという現状であった。しかし、劇の結末でメンフィスが農地を取り戻すために南部に旅立つ決意を語るように、闘いの伝統は引き継がれていく。彼は最初、エスターおばさんを信用しようとしなかったが、ホロウェイの語りを聞くうちに彼女が偉大な存在であることに気付いていく。エスターおばさんは彼に、「落としたボールは拾いに行かねばならない」と告げ、アフリカ系アメリカ人として尊厳を持って生きることを教えた。このメンフィスの学習が劇の軸になるプロットであるとも言えよう。アフリカ系アメリカ人の歴史において黒人革命の60年代は、民族意識高揚の時代であった。この時代精神を継続させるためにウィルソンはエスターおばさんを創造し、登場させたと考えられる。

参考文献

- Bottoms, Stephen. “Two Trains Running: Blood on the Tracks.” *The Cambridge Companion to August Wilson*. ed. Christopher Bigsby. New York: Cambridge UP, 2007.
- Elam, Harry J. Jr. *The Past as Present in the Drama of August Wilson*. Ann Arbor: U of Michigan P, 2006.
- Hatch, James V. “The millennium.” *A History of African American Theatre*. Hill, Errol G., and James V. Hatch. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Lewis, Barbara. “Miss Tyler’s Two Bodies.” *August Wilson: Completing the Twentieth-Century Cycle*. ed. Alan Nadel. Iowa City: U of Iowa P, 2010.
- Pettengill, Richard. “The Historical Perspective: An Interview with August.” *Conversation with August Wilson*. ed. Jackson R Bryer and Mary C. Hartig. Mississippi: UP of Mississippi, 2006.
- Shannon, Sandra G. *The Dramatic Vision of August Wilson*. Washington, D.C.: Howard UP, 1995.
- . “August Wilson Explains His Dramatic Vision: An Interview.” *Conversation with August Wilson*. ed. Jackson R Bryer and Mary C. Hartig. Mississippi: UP of Mississippi, 2006.
- Wilson, August. *Two Trains Running*. New York: TCG, 2007.
- . *Two Trains Running*. New York: Plume, 1993.
- . *The Ground on Which I Stand*. New York: TCG, 2001.
- 上杉 忍 『アメリカ黒人の歴史』 中公新書 2013

(Received: May 31, 2016)

(Issued in internet Edition: July 1, 2016)